

aputra 考、またはベートルインクの不覚？

金 沢 篤

はじめに

もう何度も引き合いに出し、今後も何度でも語ることになるはずの、“aputrasya gr̥ham sūnyam.” というサンスクリット文、それを本致では問題にしたい。そして、その中に出る aputra という形容詞の意味を、今回は特に問題にしたい。ゴンド Jan Gonda の『サンスクリット語初等文法』（鎧淳訳 春秋社）の「a で終わる語幹」の曲用を嚙ったばかりのサンスクリットの初学者が課せられた練習題 I §21 (102 頁) の全部で 21 あるうちの 13 番目の練習題、“aputrasya gr̥ham sūnyam.” に出る aputra という形容詞の意味である。鎧訳の巻末の語彙には、「aputra- adj. 息子のない。」(146 頁)、「sūnya- adj. 空虚な。」(180 頁) とある¹ので、わたしなどは迷わず「息子のない人の家は空虚である²。」との訳例を示し、「息子のない家は空虚である。」などと決してしないようにと注意を与えている。毎度口を酸っぱくして注意しているにも拘わらず、年度末の筆記試験にその文

1 Gonda [1948] には、“aputra-,a.,sohnlos.” (p.130)、“sūnya-,a.,leer” (p.148)、Ford [1966] には、“aputra-,a.,without son.” (p.130)、“sūnya-,a.,empty.” (p.148) とある。

2 結局は文脈の助けのないサンスクリット語の初等文法の教科書の練習題としての一文に過ぎないものである。aputrasya という男性単数属格を「息子のない人の」と訳して済ましているが、訳文そのものが、sūnya という形容詞の意味が「空虚な」というやや曖昧なものであることもあり、何を言おうとしているかが必ずしも明確にならない。この属格を、後に見るように、たとえば「息子のない人にとって」のように訳してみると、少しは、明瞭になるように思われるが、客観的な真実をめぐる成立する命題とは違って、結局は<一私見>に過ぎないため、ここでは、そのままに放置せざるを得ない。「空虚である」は「空虚のように見える／思われる」ということであろう。その文の作者が、その aputra という形容詞にどのような意図を籠めることも可能であるわけだから、ここで問題にしているのは、原文としてどのような語が用いられているかを明示する訳語こそを用いるべきではないかということである。その上での解釈は自由であるが、それは文脈の中でぎりぎりに詰めて論議すべきものであろう。

を出して、「息子のない家は空虚である。」の類いの訳文を見出すと、本当にかっかりする。形容詞は、名詞を修飾するものだが、その場合には固有の性を持たない形容詞は、修飾する名詞の性・数・格と同じでなければならぬとやはり口を酸っぱくして言っていたはずなのである。

ところが、そんな初等的な文法規則に反する訳し方は決してしない、ちゃんとしたインド学者、仏教学者の訳文には、この *aputrasya* に対して「息子」ではなしに「子／子ども」といった訳語を用いての「子どものない人の家は空である。」とあったりするから、これもまた困るのである。例えば、わたしなどは絶対の信頼を寄せる袴谷憲昭先生の論攷の中にさえ、

「空 (*śūnya*)、あるいはその抽象名詞である空性 (*śūnyatā*) という言葉は、「からっぽの」「欠如した」を意味する形容詞か、あるいはそのような状態を表わす名詞として使われるきわめて否定性の強い用語である。存在 (*bhāva*, *sad*) の否定としては非存在 (*abhāva*, *asad*³) の意に通ずると同時に、例えば「子供のいない人の家は虚しい (*śūnya*)」という場合のように一種の寂寥感も漂わせている。それは、存在、いや非存在すら飲み込んでしまうような深淵にも喩えうるかもしれない。」(袴谷 [1989] 38 頁)

とある。「一種の寂寥感」とか「深淵にも喩えうるかもしれない」という意味はわたしにはわからないものの、とにかく袴谷先生は、「子供のいない人の家は虚しい」という訳文を用いているのである。典拠が示されていないので、先生がこの訳文をどこから捻り出したか想像もつかないが、今問題にしようとしている “*aputrasya grhaṃ śūnyam.*” というサンスクリット文に対してのものだろう、とやはり考えざるを得ない。もしかしたら、「息子」も「子ども」も一緒、どちらでもいいだろう、と言わんばかりである。*putra* が息子で *putrā* が娘ならば、*aputra* で、「子どものいない」との解釈も可能かと思う。だが、本来動詞の過去受動分詞であるような *suta* が息子で *sutā* が娘の場合と果たして同じように考えていいのだろうか？ そもそも *putra* という語は、『マヌ法典』*Manusmṛti* の以下の用例のように、ものものしい語源解釈と結びついて説明されることが往々である。過去分詞の *suta* とは違うのである。

“*punnāmno narakād yasmāt trāyate pītaṃ sutāḥ /*

tasmāt putra itī proktaḥ svayam eva svayambhuvā //138//” (Jolly [1887], IX-138: p.207)

3 *sad*, *asad* ではない。*sat*, *asat* である。

「一三八 なんとすれば、息子はその父をプト put と呼ばれる地獄より救い出す（トラーヤテē trāyate）が故に彼は自存（神）自らによりプットラ put-tra⁴ と呼ばれる。」（田辺 [1953] 281-282 頁）

「息子は父をプト（put）と呼ばれる地獄から救う（トラーヤテ trāyate）。それゆえに [息子は] プトラ（putra）とスヴァヤンブー自らによって呼ばれた。」（渡瀬 [1991] 310 頁）

にも拘わらず、aputra との形容詞に「息子のいない」ではなく、「子どものいない」という訳語を与える人がけっこういるのである。何故なのか？ 男女平等を謳う現代の読者たちを意識、配慮した結果というのか？ それとも、親にとってはいつの時代でも、男女の隔たりなしに、子どもは同じように可愛いし、大切だと考えての結果だろうか？ わが国の山上憶良の「銀（しろがね）も金（くがね）も玉（たま）もなにせむにまされる宝（たから）子（こ）にしかめやも」を引き合いに出すまでもなく、あのサンスクリット語の初学者ならずとも誰もが知っている『ナラ王物語』の冒頭で、ダマヤンティー姫が、“kanyāratna”「宝のような娘」と呼ばれていることを知っているのである⁵。子どもに男女の性差別を持ちこむ必要はないのかも知れない。確かに putra は「男の子、息子」の意味ではあるが、子ども一般を意味して作者はそれを用いているのである、との見解は、それなりに説得力があるし、やはり『ナラ王物語』の冒頭部に出て

4 田辺氏が底本としていられる Jolly [1887] をわたしも踏まえているが、テキストには、“putra”とあって、その訳文のように ‘puttra’ とはない。

5 ただし、インドには息子／男子を宝 ratna に喩える習慣はないように思われる。宝はあくまでも秘すべきモノ。その意味でも、aputra を単に「子どものない、いない」と解するのは、インド的文脈に添ったものとは言えないのではないかと。やはり『ナラ王物語』冒頭部には、「あなた（＝ダマヤンティー）は、女（nārī）たちの中の宝石（ratna）であり、ナラは男（nara）たちの世界に於ける最高者（vara）である」とある。日本には、「子宝」という語は「子を愛し貴んでいう語」のように解され、美談のうちに語られるが、インドで娘を宝扱いにするのはやはり、田辺 [1960] の「娘は物であるから、娘を売るということは極めて普通の考え方である。」（164 頁）という流れで考えるべきなのではないか。『ナラ王物語』の “tasmai prasanno damanaḥ sabhāryāya varam dadau / kanyāratnaṃ kumārāṃś ca trīn udārān mahāyaśāḥ //” に対する北川氏の訳「名高きダマナは喜びて、王と妃に与えたり。宝の如き乙女子と、気高き三人の王子とを。」（北川・菱田 [2000] 20 頁）は確かにみごとに和訳と言い得るが、まったくの誤訳と言わなければならない。ダマナ仙が与えたのは、「王と妃に」ではない、妃という「宝モノ」を持つ「王に」である。ベートリンクの辞典には、putra-ratna の用例が『カタール・サリット・サーガラ』にあると出ている（vi, p.249）。

くる、ダマヤンティーの父のビーマ王は、“prajākāmāḥ sa ca[^]aprajāḥ”（子どもを欲していましたが、彼には子どもがありませんでした⁶）の場合のように、この aputra は apraja の意味で用いられていると言い得るのかも知れない。それとも、「子どもと言ったら男の子に決まっている、女の子などは眼中にない」とでも言うのだろうか⁷。

だが、わたしは、インド的文脈では、aprajasya ではなく aputrasya とある、その一文の翻訳としては、「子どものいない人」ではなしに、やはり「息子のいない人」と訳すべきであろうと考える。「息子のいない人ではあるが娘はいる」わたしだが、これまで、その意味で自分の「家が空虚である」という思いを抱いたことはない。日常生活において、「家が空虚である」という文は、客観的に真偽を問うことの可能な命題の類いではないのである。ラーマのいなくなったアヨーディヤーの都城が空であったり、シャクンタラーのいなくなった森が空であったりするの、袴谷先生の言われる「寂寥感」を体現する sūnya という形容詞の一活用例と見なすべきなのであろう。とすれば、今の場合のように、aputrasya 「息子のいない人」の訳語は、やはりどうでもいいわけではなく、それと同時に、その aputrasya が持っている属格も、単なる家の所有者を明示する属格のように訳していいわけではないと言うべきなのではないか。

ゴンドガ、インドのどの古典に基づいて、この練習題を案出したかは不明である。練習題の後に続く選文の冒頭が『ヒトーパーデーシャ』Hitopadeśa、とす

6 取りあえず上村 [2002] の「彼は[子孫]を欲していたが、[子供]ができなかった。」(137頁)をなぞって整合性を持たせた形で訳してみた。上村氏は prajā を子孫=子供のように訳している。後で触れる Wezler [1965] の 'Nachkommen' と 'kinderlos' (p.3) を踏まえているのだろう。「子孫」とは「後継ぎ」のことで、インドにあっては「息子」のことであろう。ここを、child とか childless と訳す英訳も散見する。

7 この視点に対しては、名詞の女性語尾 ī について記した “putrī-Tochter” (putra-Kind, Sohn)” (Thumb & Hauschild [1959], p.67:288,5) が示唆的である。つまりドイツ語では putra の訳語として用いられる Kind (子ども) も Sohn (息子) もいわば同義語で、それが Tochter (娘) と対比的に用いられるということである。名詞そのものに、性がない英語や日本語の child や「子/子ども」が、boy (少年) や girl (少女)、son (息子) や daughter (娘) の集合概念として取り扱われるのとは、違うのである。漢字一文字の「子」にしても「こ」と読んだら「子ども」と同じで「男の子も女の子」も指示するようで、「し」と読んだら「男の子」を指示するらしい。玄奘の訳語「舍利子」の例もあるから、「子」と訳しておけば無難かという思いもわからぬわけではない。

れば、ゴンドラも、有名な『ヒトパーデーシャ』のあの用例を直接的には踏まえて、その練習題の文を案出したのだろうか。だが、サンスクリット語の辞典の putra の項目下に第一義 son として第二義に child とあたりする場合もあるから、aputra で childless とするのも何の問題もないのかも知れない。やはり、原著者がその文で、何を言おうとしているかの詮議、色々あっての解釈の問題であるから、早々には決めつけられないのである。先にわたしは、今回は aputrasya の意味について詮議したいと言った。結局、わたしは、問題の一文に対して、「子どものいない人の家は空である」のか「息子のいない人の家は空である」のか、を問おうとしているのではなく、「息子のいない人にとって、家は空である」という訳文を与えてこそ、皆が皆傾聴に値する、インドの箴言となるのではないかと言おうとしているだけなのかもしれない。だが、結局は、作者の意図である。問題の文が、詩節の中に登場するということが、もしかしたら重要な要因となるのかもしれない。putra が「女の子を含む子ども一般」を指す名詞ではなく、やはり「息子、男の子、子ども」を指す名詞だと考えられるから、aputra は、やはり誤解や拡大解釈を生みやすい「子どものいない人」よりは、「息子のいない人」と訳しておいた方が無難ではないか、といったほどのささやかな提言である。にもかかわらず、この場合、aputra では、作者は「女の子を含む子ども一般」を意図していたのだと積極的に解する立場もあり得るのである。文法の教科書の練習題の場合はおくとして、わたしとしては今、aputrasya の実際の用例を、二例念頭においているのである。一つは、『ヒトパーデーシャ』や『土の小車』 *Mṛcchakaṭika* の

[A] aputrasya grhaṃ śūnyam / śūnyam aputrasya grham.

もう一つが、『獅子座三十二話』 *Simhāsānadvātrimśikā* (= 『ヴィクラマ・チャリタ』 *Vikramacarita*) の以下の用例である。

[B] “aputrasya gatir nāsti svargo naiva ca naiva ca /
tasmāt putramukhaṃ dr̥ṣṭvā paścād bhavati tāpasah //”

また、『獅子座三十二話』の場合は、その [A] と [B] が両方共に出現する場合もあるのである。すると、『獅子座三十二話』の翻訳を行う者には、その両方の用例に訳語、訳文を与えることが求められるのである。どちらも「子どものいない人」とするのか、それぞれ別様に訳し分けるのか、などとの好奇心がわくではないか。

1. ゴンダの『サンスクリット語初等文法』からベートルリンクの方へ

ゴンダの鑑訳『サンスクリット語初等文法』を教科書にしてサンスクリット語文法を学習したわたしは、選文の初っ端に収録されているのが『ヒトーパーデーシャ』と知って、金倉圓照・北川秀則訳『ヒトーパーデーシャ』（岩波文庫）を直ちに購入したことを覚えている。岩波文庫では珍しい二段組のその立派な訳本を手にして、次は原典と英訳、と勇んでいたが、何をどのように入手しているのか皆目見当もつかず断念した。何年か後に、偶然手にしたインド書のカタログ、『身毒之栄華⁸』 *Glory of India* 誌を頼りに、思い切ってインドに発注して入手したのが、カーレー M.R.Kāle のもの。ご存じモチラル書店刊の外国の苦学生向けの便利な英訳付きの復刻本である。1976年にデリーでリプリントされたとあり、12ルピーと印刷されているが、当時はいくらに相当したのか。おそらく送料などの方が高かったはずだ。

選文の最初の I が《ヒトーパーデーシャ 2,5》「遣り手婆さんの魔物ガンターカルナ退治のはなし」（119頁）、次の II が《ヒトーパーデーシャ 3,3》「洗濯屋と虎の毛皮を着た驢馬のはなし」（120頁）である。そのサンスクリット語の選文の訳文を岩波文庫の『ヒトーパーデーシャ』の中から捜し出すこともそう難しいことではなかったと記憶する。この『ヒトーパーデーシャ』は、岩波文庫本によれば＜プロローグと四話＞から構成されており、練習題の問題の aputra の詩節は、「第一話 友を得る道」の第（九六）詩節（55頁）に、選文の二つは、順に、第二話挿話四（112-113頁）、第三話挿話二（155-156頁）として難なく見

8 金沢 [1985] の中でこのカタログについて触れたことがある。サンチーの大門の写真をオレンジ色の枠組みで飾ったこのカタログは、今でもわたしの手許に残っているが、その裏表紙は、なんと全面ベートルリンク&ロートによるいわゆる『ベテルブルグの辞典』に関してのものだった。“A Landmark in the History of Oriental Publications. A remarkable Sanskrit-German Dictionary now Under Translation from German to English. Sanskrit Wörterbuch von Otto Böhtlingk & Rudolf Roth (St. Petersburg Dictionary) in 7 Big Volumes. Translated into English By Madhusudan Mishra.....Edited by Dr. V. Raghavan & Prof. J.L. Shastri.....Motilal Banarsidass.” この計画は、頓挫し、実現しなかったと思われる。モチラル書店は、この代わりに 1990年、わが国の名著普及會によって 1976年に復刻再刊されたオリジナルのインド版（全8巻）を刊行している。わたしは、懇意にしていたインド書を扱う書店の店主に「今後これはもう入手出来ませんよ」と言われて、在庫していた最後の2セットを購入した記憶がある。1セット（シュミットによる補巻を含めての8巻）4,500円と鉛筆で書いてある。今からすると信じられない価格である。

つかる。ゴングは、二つの選文に関しては、それぞれ「2,5」「3,3」としている
 ので、岩波文庫版が和訳の底本としている『ヒトパーデーシャ』のサンスクリット
 原典とは別物なのだろうが、残念ながら、鏝訳の『サンスクリット語初
 等文法』には、何に依拠したものかについては一切記載がない。わたしの場合
 は、1975年度4月から原実先生の授業でサンスクリット語の勉強を始めたのだ
 から、1974年7月にその教材が刊行されているので、そのテキストを使って
 原実先生からサンスクリット語を教わった第一期生ということになる。前年
 はどの教科書を使ったのか考えたこともないのである。当然、わたしは初版
 を使っていたはずだが、文字通りのフランス装（無線綴じ）で、ちょっと使っ
 ていると本がばらけてしまったことを覚えている。表紙の間にばらけた頁を挟
 んで持ち運びの時は輪ゴムで固定していたことを覚えている。翌年だったか、春
 秋社に文句を言ったら、それを送ってくれたら新しいのと取り替えると言っ
 てきたが、書き込みも色々あるし、初版はやはり貴重だろうからと送らないで済
 ました。そしてその記念すべき初版は、今でもわたしの手許にある。自分が
 教師になってそれを教科書にして教え始めると、教師用にと毎年新しい本が一
 冊は書店から届けられるようになったから、20冊以上はあるはずだ。新型コ
 ロナ禍で対面授業が行えていない今年度用に届けられたものは、先頃会議で二カ
 月以上ぶりに大学に足を運んだ折に確認したところ、2019年2月20日刊行
 の「新訂第28刷発行」とあった。恐らく出版社は新年度に備えて一年に一回
 くらいは増刷するのではないか。新訂版の第一刷は1989年11月20日発行で
 ある。新訂版に先立って、補訂版の第一刷というのが1982年3月30日発行と
 なっているので、補訂と新訂の際に若干の修正・増補などが行われたものと
 思われる。誤植探しをしたことはないが、先日のネット授業の折に気づいたもの
 に、練習題Ⅲ §23の「5.agnir evāgner bheṣajam」の文末のピリオドの脱落が
 ある。そういうものもあるんだと思い、練習題をざっと当たってみたが、ピ
 リオド脱落はそこだけだった。ばらけた初版を確認してみたが、そこにはちゃん
 とピリオドがあった。補訂か新訂の際に落ちたのだろう。初版以来の誤植で気
 になっているのが一つある。冒頭に置かれた鏝先生による「訳者序」の中に言
 及される、ガルベ Richard Garbe 編のベートリンクの名著『サンスクリット読
 本』、“Otto Böhtlingk’s Sanskrit Chrestomathie⁹⁾”とあるべきものが、hが落ちて“Otto

9 これは初版（1845）ではなく、随分様変わりした R.Garbe によって復刊された第3版

Böhrtling's Sanskrit Chrestomatie” となっている¹⁰。

製本技術が進歩したのか、それ以後本がばらけることはなくなったのは、たいしたものだ。鑑先生が翻訳の底本とした文法書のオリジナルはドイツ語版とのことであるが、もう何十年もこの鑑訳のゴンダ文法書を使っているにも拘わらず、ドイツ語原典というのにお目にかかったことがない。もしかしたら、そちらには、選文などの典拠などがきちんと記載されているのかも知れないが、たまたま参照することを得た、英語版、Ford [1966] にも何一つ触れていなかった。ドイツ語原典にも記載がないのかも知れない。極微文献学者としては、ゴンダの教科書の裏を取りたいという気持ちは確かに強いのである。

インド古典の訳本を手に入れて使う時には、その訳本が訳の底本にしている原典の方もしっかり入手しておかないと訳本を十分に活かせない、と学生には言うようにしている。ということで、岩波文庫本の『ヒトパーデーシャ』を入手した時、しかたなく入手出来たカーレー本で、カーレーによる英訳とその原典のサンスクリット語のテキストを並べてみた。

「(九六) 子のなき人の住居は空（うつろ）。／友なき人の住居も然り。／智慧なき人の心は空。／されど“貧”とは、一切の／空なるをぞ言うと知れ。」（金倉・北川 [1968] 55 頁）

“The house of the sonless is void, and so is of one who has no good friend; all the quarters are void to a fool, but all is void to poverty.” (Kale [1896/1967//1976], Tr. p.25)
 “aputrasya grhaṃ śūnyam sanmitrasahitasya ca /
 mūrkhasya ca diśaḥ śūnyāḥ sarvaśūnyā daridratā //128//” (Kale [1896/1967//1976], Text, p.21)

いかが。やはり、この詩節、詩節番号が異なるだけでなく、第3パーダの読みが異なっている。ということで、横着してはいけない、金倉・北川訳が底本にしているピーターソン Peter Peterson 本を探さなければ、ということになる。さすが、学術的な「底本について（付 底本訂正表）」が巻末にある。「本和訳の底本として用いたテキストは、Hitopadeśa by Nārāyaṇa, edited by Peter Peterson,

(1909) である。

10 鑑 [1988] でも同書が言及されているが、やはり h の脱落はそのまま (473 頁) だが、それが鑑 [2003] に収録される際には、ちゃんと直っている (336 頁)。文法書の方のも、今度改訂が行われる時には直るのだろう。

Bombay Sanskrit Series 33, Bombay, 1887 であるが、・・・」(297 頁) とある。やはりボンベイか。1887 年の著作である。そんなものは今は売っているはずがない、やはり梵文研究室かどこかの大学図書館にお世話になるしかないか、と半ば入手を諦めかかったことがあったが、馴染みの本屋に相談したところ、ピーターソンの『ヒトーパデーシャ』なら復刻されているから、入手可能と言ってきた。もう 20 年も前の話である。

“aputrasya grham śūnyam sanmitrarahitasya ca /
mūrkhasya hrdayam śūnyam sarvaśūnyā daridratā”¹¹//96//” (Peterson [1887//1986/1999], p.29)

金倉・北川訳でも、文の構造は正しく捉えられているが、aputra が「息子のない、いない人」ではなしに「子のない、いない人」である。何故「息子」でないのか？ まあ、金倉・北川訳の方は、韻文訳の詩節部だから、それを口実に出るかも知れない。「子のなき人の住居（すまい）は空（うつろ）」¹²。金倉・北川訳はみごとに七七調に決まっている、さすがと言わざるを得ない。金倉先生の相棒を務めた北川先生は、それに味をしめたか？ 『ナラ王物語』の初めの五章の和訳でも、見事にシュローカを全篇七五調で優雅に決めておられる。毎年、こちらの方は、サンスクリット語の上級クラスでやはり拝見しているが、形を優先させたせいか、意味の方に多大の犠牲を出しているように見受けられる。詩人による詩節の翻訳はやはり願ひ下げにしたい。われわれは翻訳に詩を求めてはいない、正確な意識をこそお願いしたいものである。訳者の方々には、形などは二の次、せめて意味だけは正しく伝えてもらいたいものだ。ということで、このシュローカの部分をなす詩節は、「子のない人の」でいいのだろうか？ 息子ではなく、子どもこそ作者の意図したことであるのだろうか。

サンスクリット語の初学者が最初に出逢うサンスクリット語の古典は、もしかしたら『ヒトーパデーシャ』かも知れない。ゴンダの『サンスクリット語初等文法書』でサンスクリット語入門を果たしたばかりの学生は、最初の練習題

11 Kāle 版も Peterson 版も、第 4 パーダの “sarvaśūnyā daridratā” が気にかかるが、本致では詳しくは触れない。文法的に daridratā という tā で終わる抽象名詞が主語となって、sarvaśūnyā という形容詞を補語としている点である。これはどう解釈したらよいのだろうか。どこかに突破口は見つかるのだろうか。

12 これが「息子のなき人の住居（すまい）は空（うつろ）」では、しまらない。金倉・北川訳では詩節（シュローカ）は、すべて、この「七・七調」で通しているのである。

Iの中で、問題の“aputrasya gr̥ham śūnyam.”という文に出逢ったはずだ。そして「息子のない人の家は空虚である。」という訳文も得たはずである。だが、この文が、教科書の選文の筆頭に採用されている『ヒトーパデーシャ』から採用されたということを生知らずに済ます人もあるかも知れない。『ヒトーパデーシャ』を読まない人にはわからないはずだ。先には、金倉・北川訳の岩波文庫本を読んでみたが、今度は、話題にされることのほとんどない、本邦初の『ヒトーパデーシャ』全和訳の平松友嗣氏の訳を読んでみよう。詩を目指した訳文でない点には好感が持てるが、やはり「息子」ではなく「子」。

「一三五 子もなく、また真実の友を欠ける ものの家は空なり。愚者には八方が空であり、貧乏は一切が空なり。」（平松 [1956] 99 頁）

金倉・北川訳と違うので、底本は Peterson 版とは別物であろう。平松訳の場合は、「翻訳に使用しました底本は、かの名高き梵英辞書の編者であります Sir M. Monier-Williams 氏がその著 Indian Wisdom の中に於いて excellent edition といって称揚しています、故 Francis Johnson 教授の編纂にかかる Hitopadeśa (London. 1867¹³) であります。」(7 頁) とあるので、仕方ない、Johnson 版を見る。

“aputrasya gr̥ham śūnyam sanmitrarahitasya ca /

mūrkhasya ca diśaḥ śūnyāḥ sarvvaśūnyā daridratā //134//” (Johnson [1847], p.24)

ベートルリンクの名著の一つ『インド箴言集』*Indische Sprüche* の中に『ヒトーパデーシャ』の aputrasya gr̥ham śūnyam を含む問題の一詩節が収録されていることを知らなかったのではない。ゴンドの初等文法書が選文の I、II として収録している『ヒトーパデーシャ』の有名な二つの挿話 2,5 と 3,3 を収録しているベートルリンクのもう一つの名著『サンスクリット読本』*Sanskrit Chrestomathie* には、残念ながらその aputrasya で始まる詩節は収録されていないようである。

13 おそらく、平松氏のこの数字はローマ数字記載のものを誤読した結果ではないか。本来は 1847 とあるべきものと思考する。また訳文にある詩節数が (一三五) となっているが、Johnson 版では 134 である。平松 [1956] の凡例には、「そうした関係上偶頌の番号は、すべて前記の底本 Johnson 本の番号と同一であります。」(7 頁) とある。272 頁以降、柱の記載「第四篇 平和の巻」とあるべきところが、すべて「第三篇 平和の巻」となっている。また本文中で挿話を指示するはずの「第三話」などが、「第三篇」などの意味で用いられていたりする。さらに先と同じように柱に「第三篇 戦争の巻」とあるべきところに突如「第四篇 戦争の巻」(214 頁) と現れたりする。誤植と呼ぶべきものが散見するのは惜しまれる。

先にも触れたが、この詩節と類似の詩節が、シュードラカの『土の小車』の冒頭にも出てくることは知る人ぞ知るだ。今度はそちらを見てみよう。

“śūnyam aputrasya gr̥haṃ cira-śūnyam nāsti yasya sanmitram /
mūrkhasya diśaḥ śūnyāḥ sarvaṃ śūnyam daridrasya //8//” (Karmarkar [1937//2002], p.3)

問題の箇所は、3番目の単語、śūnyam が先頭にきている。語順が違うだけで、同一趣旨の文である。aputrasya gr̥haṃ śūnyam に対して、『土の小車』では、śūnyam aputrasya gr̥ham。

この、シュードラカの大戯曲『土の小車』の和訳者、岩本裕氏の手にかかると、この全体は、以下のように訳される。みんな詩人と見える。こちらは七・五調だ。「子のない人¹⁴の家は空（から）、／善友なき人は長く空、／愚か者にはどこも空、／貧乏者には、みんな空。」(岩本 [1958] 185 頁)

大事な形容詞 śūnya が、漢字一文字で「空（から）」と訳されている。サンスクリット語の原文に参究できない通常の読者¹⁵には、その詩の意味も必ずしも明確に伝わらないのではないかと畏れる。インドのカルマルカル R.D. Karmarkar は、以下のように英訳している。

“Empty [is] the house for one without a son; for him who has no real friend [every thing, or, the house is] empty for long; for a fool, empty [are] the quarters¹⁶; for a poor [person] all [is] empty.” (Karmarkar [1937//2002], p.3)

わたしは、このカルマルカル先生の英訳を全く素晴らしいと思う¹⁷。śūnya と

14 aputrasya に対するこの岩本訳の「子なき人の」は、原著者の意図を正しく反映したものは不明。後出のアーチャーラヤの“child”も同じ。わたしは「息子のいない人の」と、息子に限定すべきと考えるが、もしかしたらその必要はないのかも知れない。

15 いや研究者にとっても、この場合、異例なことに岩本氏が翻訳にあたって依拠した底本が明示されていないようなのが困りものである。たぶん原稿には訳者の前口上の最後にでも底本についての言及があったのであろうが、頁の関係でその最後の部分がカットされたのではないか。

16 Cf. “suṅṅāo diśāo” (śūnyā diśaḥ) “quarters [seem to be] void” (Karmarkar [2002], p.218); 「あたりには、誰もいないし」(岩本 [1959] 241 頁)。

17 Karmarkar [1937//2002] には、珍しいことに、その“Foreword”中に、翻訳者としての Karmarkar 論のようなものが復刻者によって展開されていて興味深い。例えば “Prof. Karmarkar’s translations always aim at the golden mean between the sanskrit structure and English idiom. The choice of English expressions bears testimony to the high standard of English attained

いうサンスクリット語の形容詞に empty という英語の形容詞を当てて、詩節全体を極めて合理的に過不足なく正確に英訳している。

一方、同戯曲の最新の英訳と言い得る、アーチャールヤ Diwakar Acharya の英訳も以下に引こう。

“Empty is the home for a man without a child, / Empty the long hours for a man with no true friends, / Empty for a fool are all four quarters / And empty for the poor is all the world around!” (Diwakar Acharya [2009], p.9)

いかが。わたしには、この英訳はどうにもいただけない。アーチャールヤにしてみれば、先行する他の諸訳からの独自性を打ち出そうとしたのだろうか。まずは、empty を形容詞とする第 1 パーダの主語たる grha を、カルマルカルの house に対抗して home としている点である。house と home はどちらも「家」を意味する同義語であると言うのであろうか。「H ハウス」に対して「P ホーム」と言うのではないか。わたしは、前者を「家」とし、後者を「家庭」と理解する。「家」と「家庭」は微妙に異なる概念である、と言いたいところである。家を持っている人がすべて家庭の持ち主とは限らない。家を持たなくとも家庭を持っている人がごまんといっているのではないか。この場合は、やはり建物に具体化する「家」である必要がある。今はやりの StayHome は「家にいる」という意味ではない、「家族と共に [家に] いる」という意味なのだろう。そしてアーチャールヤの英訳では、第 2 パーダがいけない。とてもいけない岩本訳に接近した英訳である。確かに、具体化しているサンスクリットの原文に登場するサンスクリット語はすべて訳語が与えられてはいる、どこがいけないのかとアーチャールヤは言うかも知れない。カルマルカルの英訳のどのパーダも、それぞれ独立の文になっているけれど、アーチャールヤの英訳は、第 2 パーダは文になっていないと言いたいのである。問題の形容詞 sūnya は、この原文では、cira-sūnyam と用いられている。sūnya の前についでいる cira は副詞と考えられる。形容詞の sūnya の語尾は、中性単数主格と解したい。とすれば、その第 2 パーダで省略されている主語は、第 1 パーダに明確に出てきている grha と考えるべきである。カル

by him. He has struck a scholarly balance between Sanskrit dramatic style and exact, direct and unambiguous nature of his English renderings. He has never left any Sanskrit word untranslated.” (p.ii) などと引用し出すとなかなか止められないほどである。当の R.D. Karmarkar についても、その前書きの書き手である、プネーの BORI の主任研究員？である P.G. Lalye 氏についてもまったく知るところのないわたしではあるが、大いに感心した次第。

マルカルは、その当たりの理解にぶれは全くない。第1パーダの主語は grha、第2パーダは省略されている、第3パーダの主語は diś（女性複数主格）、第4パーダの主語は sarva（万物、万事で中性単数主格）。形容詞 sūnya で形容される grha が diś に拡大し（複数の家）、さらに拡大して sarva（一切の家たる万物）に到る点をしっかりと踏まえているのである。なお、カルマルカルが、問題の詩節の “śūnyam aputrasya grham” の英訳に付した註記には、“The house of an aputra (na vidyate putraḥ yasya) is śūnya, void of all delight” と、記した上で、その理由として、① putra「息子」がとりわけ両親にとっての「歓喜の鎔（かすがい）」 ānandagranthi であること¹⁸、そして②「息子」が「父親が地獄に墜ちるのを防ぐ存在であること」の二点をあげている（p.348, (8)）。その理屈の妥当性は今は問わないとしても、ある意味では不可解な形容詞 sūnya という意味を誤魔化すことなく真面目に考えようとするその姿勢を評価したい。

2. ベートリンクの『インド箴言集』を中心に

いや話を元に戻そう。わたしは本稿を aputra 考として書こうと考えた時、実は、論題の後半部こそを問題にしたかったのである。そう、サンスクリット文献学に携わる者にとっての最高の権威の一人、あのベートリンクが、『インド箴言集』の第一巻に、

18 カルマルカルは、“antahkaraṇatattvasya dampatyō snehasaṁśrayāt / ānandagranthir eko^ayam apatyam iti badhyate//” (Uttarāmacarita III, 17) 「子孫 (apatya) と称する、この一つの歓喜の鎔 (ānandagranthi) は、愛の住居に基づいて、両親の内官の真実に、結ばれている。」(拙訳) を引用している (p.348)。なお Karmarkar [2002] では、その詩節は III, 18 に相当し、“snehasaṁśrayāt dampatyōḥ antahkaraṇatattvasya apatyam iti ayam ekaḥ ānandagranthiḥ badhyate / (anuṣṭubh)” と解し、“The vedic idea about a son is that he is the father himself re-born. Here, Bhavabhūti tells us that the son is the tie that binds the hearts of the father and mother, giving rise to unadulterated joy, and which gets stronger and stronger as years pass by.” (p.236) とコメントしている。Cf. Karmarkar [1963//1971], p.93. この apatya は一般的に「子孫、後裔、児」(財団法人鈴木学術財団 [1986] 81頁) と解されるものであるが、例えば有名な『サーヴィトリー物語』の中で、ヤマ神に対するサーヴィトリーのせりふ “mama^anapatyaḥ prthivī-patiḥ pitā, bhavet pituḥ putra-śataṁ mama^aurasam” (Brough [1951], p.48) “The king my father has no son. May my father have a hundred sons of his own,…” (p.49) を見るまでもなく、apatya には、娘は入らないのである。この apatya と同様、さらによく用いられる prajā 「子孫」も、基本的には「娘」は含まれないと考えるべきであろう。

“aputrasya gr̥haṃ śūnyam̐ dik śūnyābāndhavyasya ca /
mūrkhasya hr̥dayam̐ śūnyam̐ sarvaśūnyā daridrātā //”

を 444 番目の箴言として収録し、それに対する翻訳を

“Leer ist das Haus dem Kinderlosen; leer die ganze Welt dem, der keine Angehörigen hat; leer das Herz dem Thoren; leer Alles der Armuth.” (Böhntlingk [1870-1873//1966], i, p.82) 「子どものいない人にとって、家は空虚であり、家族を持たない人にとっては、全世界が空虚であり、愚者にとっては、心臓は空虚であり、貧困にとっては一切が空虚である。」(拙訳)

と与えているのを知っていたからである。ベートルリンクもまた問題の *aputra* を *kinderlos* 「子どものいない」と訳しているのである。あの『ペテルブルクの大辞典』では、*aputra* に対して、名詞としては “Nicht-Sohn” (息子ならざる者)、形容詞としては “sohnlos” (息子のいない) (i, p.309) というドイツ語を与えている¹⁹ ベートルリンクがである。しかも、後者に関しては、その用例として、今の『ヒトローパデーシャ』の用例 (I, 120)、それと等しいとして『土の小車』の用例 (2,9,10) の箇所を指示している。にも拘わらず、上に見たように、実際には、*sohnlos* ではない *kinderlos* を使って訳しているのである。ベートルリンクの中ではどのように考えられているのだろうか？ 翻訳の実際においては *kinderlos* を使ってしまったけれど、辞典編纂に際しては、反省して？ *sohnlos* に改めたというのだろうか。 *kinderlos* は、ベートルリンクの辞典では、あの “*prajākāmah sa ca^aprajah*” の *apraja* という形容詞に対する訳語である (i, p.315)。したがって本攷の論題の意図するところは、そのあたりの経緯を闡明することと言い換えてもいい。圧倒的な梵語マスターであるかのベートルリンクに『ヒトローパデー

19 ベートルリンクは *aputrika* にも *aputrika* にも “sohnlos” (Böhntlingk & Roth [1852-1875], i, p.310) という訳語を与えている。また *putra* に対しては男性名詞として、当然のように、“*Sohn, Kind*” (iv, p.762) を与えているが、注目すべきは、例えば *putrau* という両数の用例に対して、“*Sohn und Tochter (natürlich auch zwei Söhne)*” (iv, p.763) を与えていることである。おそらくこれを踏まえているのであろうわれらが財団法人鈴木学術財団 [1986] の *putra* 項目中には、<両数>として「二人の息子または息子と娘」(792頁)と記載されている。これでは誤解を招くのではないか。『ペテルブルク大辞典』の記載の意図「*putra* の両数は、当然ながら<二人の息子>であるが、時に、<息子と娘>の意味で用いられることがある」がうまく伝えられていないのである。*aputrasya* に対して「子どものいない人の」といった日本語の訳語がしばしば用いられる背景には、これに類した粗雑な誤解があるように思われてならない。

シャ』の全訳があるという話は耳にしないが、『土の小車』の方は、みごとに全訳がなされて公刊されているのである。本来ならば、その全篇にわたってベートリンクの訳語を検証すべきところだが、それは適わぬ高嶺の花。

“Leer erscheint das Haus dem Kinderlosen, ewig leer dem, der keinen guten Freund hat; für den Thoren ist Alles leer, wohin er auch shauen mag; für den Armen ist Alles leer.” (Böhntling [1877], p.3) 「子供のいない人にとって、家は空虚に見え、親友のいない人にとって、永遠に空虚に見える。愚者には、どこもかしこも一切が空虚であり、貧者には、一切が空虚である。」(拙訳)

『ヒトパデーシャ』や『土の小車』の同種の一文、“aputrasya gr̥ham sūnyam” と “sūnyam aputrasya gr̥ham” の aputra に対してはやはりなぜかベートリンクは端的に「息子のいない」を表わす、より適当と思われる訳語 sohnlos ではなく、「子どものいない」と訳されがちな kinderlos を用いている。何故だろう？ 思いあまって、わたしは、大学入学時からの友人で独語マスターである T 君に『ヒトパデーシャ』の先の用例に対するベートリンクの訳文を、サンスクリットの一詩節の訳であるとして示し、本当は Kinderlosen ではなく Sohnlosen として欲しいところだが、ドイツ語表現の見地から、ベートリンクがそうしなかった理由、そう出来なかった事情がなにかあるだろうか、と率直に訊ねたのである。すると直ちにメールが返ってきた。「訳文は特に詩節であることを意識したもののようではない。ドイツ人は造語を使いたがらない傾向がある、kinderlos は辞典に立項されているが、sohnlos の方はされていない。グリムの辞典にもないし小学館の大辞典にもない。どうしても sohnlos の意味を重視したいならば、関係代名詞を使えばいいのだが、それは、第 2 パーダで使っているから、それを重ねるのは能がないとして、辞典にも立項されている kinderlos に甘んじたのかも知れない。」とても理に合ったその説明に、複合語大好きサンスクリット語の古典作品にどこまでもどっぷりと浸かっているわたしとしては、ふむなるほど、と思ったりもしたのである。だがわたしには、当初から、あのベートリンク大先生にしても、既に先行訳例の少なからずある詩節の訳文ということで、そのあたりへの配慮、忖度が働いたのではないか、との勘ぐりがあったのである。拙訳は数多くないにしても、インド学の草創期より英訳は既にいくつも発表されているのである。わたしの今回の論題の後半部は、不可解なとも思える

ベートルインクのそうした実際的な立場を想像してのものであった²⁰。

実はベートルインクの aputra 理解をうかがう、もう一つの重要な用例を看過することはできない。同じ、『インド箴言集』の 443 に収録されている以下の用例である。こちらが 443 で、先の『ヒトーパデーシャ』や『土の小車』の方が 444 である。どちらも aputrasya で始まる箴言だから、二つ続くのは不思議でもなんでもないが、実は、その『箴言集』の初版では、よりポピュラーな 444 が 157、443 が 3532 であることから容易に想像つく通り、片や第一巻 (p.28)、片や第三巻 (p.29) に隔離されて置かれていたのである。したがって、aputra に対する訳語の違いなどは、よほどの物好きでもなかったら気づかなかったであろう。したがって第二版の復刻版の常用者であるわたしなどにしても、同

20 わたしとしては、ベートルインクの頭には、ドイツ語の Kind も Sohn も別の語であるとの明確な意識はないのではないかと考えたいところである。日本語での「子ども = 息子 + 娘」的な理解はなかったと。ならばあの『ナラ王物語』の “prajākāmāḥ sa ca[^]aprajah” は、どうなのか？ 「そのビーマ王に、ダマナ仙の魔術によって、一人の娘と三人の息子が生まれた」とあるではないか。われわれは、もしかしたら、ここでも勝手に思い込んでいただけなのかもしれない。ビーマ王は、「宝のような娘」であるダマヤンティー姫の誕生を望んでいたのではなかった。自らの後継ぎ／子孫 (prajā) を望んでいたのだが、その後継ぎ／子孫がどうしても得られなかった。いわば、ダマヤンティー姫の誕生は、「おまけ、望外の幸せ」だったというのが、実情なのではないか。ビーマ王のダマナ仙に対する供養が素晴らしかったため、もしかしたら一人でもよかった後継ぎ／子孫が、喜び過ぎたダマナ仙によって男子三人と宝のような娘一人が授けられたというだけのことだったかも知れない、わたしは、今はそのように考えている。作者の頭の中にも、そのへんの事情をやさしく誤魔化す思惑が働いたようにも思われるのである。なお、鏝 [1989a] の「まえがき」の冒頭『『ナラ王物語』を初めて手にしたのは、昭和三十一年、東大梵文学科辻直四郎先生の講筵に列席した際であった。開卷第五頌 d ‘prajākāmāḥ sa cāprajah’ 中の ca に、感慨を込めて言及された辻先生の姿が、今なお記憶の中に鮮明に残っている。】(3 頁) は興味深い、なにかわかるような気がする。この箇所、鏝訳は「・・・この王こそは、嫡子を望みながら、嫡子がありませんでした。」(12 頁) とある。鏝氏が三つのシュローカに立て続けに 4 例出てくる prajā (apraja を含む) を、すべて「嫡子」で訳している点は大いに好感が持てる。一方、われらがヴェッツラー訳 “Er wünschte sich sehnlichst Nachkommen, denn er war kinderlos.” (Wezler [1965], p.3) は、訳語を使い分けている点、問題の ca の読み方、共に共感できない。見事な北川訳「これに劣らぬ勇猛士、ヴィダルバ国のビーマ王、万徳すべて備われど、願う 子宝 今になし」(19 頁) は論外である。こんなところに「子宝」という訳語を使って欲しくない。ビーマ王は、単に「子ども」がないので「子ども」を欲しがっているのではない。自分の「後継者」、つまり「息子」がとにかく欲しいのである。

一頁 (p.82) に 443 と 444 の番号を認めても (訳文中の 1 行目に、“Sohnloser”、6 行目に、“Kinderlosen” とあるのを認めても)、443 の訳文が頁最上行でその原文が前頁 (p.81) の本文最下行にあるせいか、相互に関係し合った箴言だとはいえず、T 君がわたしに示してくれた、「ドイツ人は辞典にない語、造語は使用したくない」という原則は、ベートリンクがサンスクリット文を独訳する際には、必ずしも当てはまらないことが確認出来るのである。ということは、ベートリンクは明確な意識をもって両者に出る同一語 aputrasya を訳し分けている、ということなのだろうか？

“aputrasya gatih nāsti svarge naiva ca naiva ca /

tasmāt putramukhaṃ dṛṣṭvā paścād bhavati tāpasah //” (Böhlingk [1870-1873//1966], i, p.81)

この『ヴィクラマ・チャリタ』85 の用例に対しては、ベートリンクは何と以下のように訳しているのである。

“443. (3532.) Nie und nimmer gelangt ein Sohnloser in den Himmel; darum wird man erst dann Asket, wenn man eines Sohnes Antlitz gesehen hat (d.i. wenn man einen Sohn gezeugt hat).” (Böhlingk [1870-1873//1966], i, p.82) 「息子のいない人には、天国への門は開かれることはない、絶対ない。それ故に、人は息子の顔を見た後に、初めて、苦行者になるのである (= 人は息子を設けるまでは決して苦行者にならないのである)。」(拙訳)

一方、同書初刊本では

“aputrasya gatih nāsti svargo naiva katham ca na /

tasmāt putramukhaṃ dṛṣṭvā paścād bhavati tāpasah //” (Böhlingk [1863-1865], iii, p.30)

“3532. Für den Sohnlosen giebt es keine Zuflucht und auch keinen Himmel; darum wird man erst dann Asket, wenn man eines Sohnes Antlitz gesehen hat (d.i. wenn man einen Sohn gezeugt hat).” (Böhlingk [1863-1865], iii, p.30) 「息子のいない人には、避難所も天国もない。・・・」(拙訳)

ベートリンクは、この 443 の用例に対しては、テキストの読みを変更したこともあり、第二版本を刊行するに際して、訳文を変更している。444 の方は手を入れずに、初刊本そのままである。ベートリンクの中では、sohnlos も kinderlos も同義という意識があるのだろうか。それともやはり明らかに相違す

る言葉であるとの認識を持った上での訳し分けだろうか。それが問題である。箴言の知名度からすると、444 が圧倒的に有名であるように思われる。先行訳も 443 に関してはほとんどないのではないか。だからこそ、ベートルインクは第二版本を刊行するに当たって、原文そのものを詮議して変更を加え、その原文の変更に応じて、推敲を重ねて、訳文を変更したにも拘わらず、訳語 *sohnlos* はそのままである。テキスト中に出る *svargo* にしても、ベートルインクが *svargo* を捨て、単数処格の *svarge* に変更したのに対して、エジャートン Franklin Edgerton は以下の用例に見るごとく、ベートルインクが捨てた読み、男性単数主格 *svargo* を採用しているのである。

この『ヴィクラマ・チャリタ』に関しては、その立派な研究成果であるエジャートンの刊本には、『ヒトーパデーシャ』の方の問題の詩節も出てくるので、エジャートンの解釈をうかがうべく、併せて参照してみたい。

“aputrasya gatir nā’sti svargo nāi’va ca nāi’va ca;

tasmāt putramukhaṃ dṛṣṭvā bhavet paścād dhi tāpasah.” (Edgerton [1926], ii, p.61)

“There is no help [or, ‘no going to heaven’] without a son. And so: no son; paradise is never, never for him. Therefore only after seeing his son’s face should a man become an ascetic.” (Edgerton [1926], i, p.67) 「息子なし」ではお手上げである。つまり、息子がいないならば、彼には天国は決してないのである。それゆえ、息子の顔を見た後に、人は苦行者となるべきなのである。」(拙訳)

“aputrasya grhaṃ śūnyam, deśah śūnyo hy abāndhavaḥ;

mūrkhasya hrdayam śūnyam, sarvaśūnyā darīdratā.” (Edgerton [1926], ii, p.159)

“Empty is the house of a sonless man; empty is a place where there are no kinsfolk; empty is the mind of a fool; empty in all respects is poverty.” (Edgerton [1926], i, p.174) 「息子のいない人の家は空虚である。・・・」(拙訳)

ベートルインクが「息子のいない」*sohnlos* と「子どものいない」*kinderlos* と訳し分けているのに対して、エジャートンの方は躊躇なくどちらの *aputrasya* も、「息子なし」*without a son, sonless* である。わたしは、これこそ翻訳者の態度だろうと思う。ベートルインクにも、『インド箴言集』を編む時には、そのように振る舞って欲しかったと思う。ベートルインクはどうしたと言うのだろうか？ 簡単には答えを出せない難問には違いない。だが、わたしには、名詞に性のない英語や日本語による翻訳の場合と、ベートルインクの名詞に明確に性のあるドイツ語による翻訳の場合の差異は、どうしても無視できないほどにやはり相当

に大きいように思われるのである。

3. apuṭrasya に対する諸訳の推移

ここで再びベートリンクから少し離れて、これまで伝えられている近現代人による apuṭrasya というサンスクリット語に対する訳語を整理しておきたい。用例を限定するという意味で、ここでは以下の四種類に分類して見てみたい。圧倒的に多いのが、やはり『ヒトーパデーシャ』の用例 “apuṭrasya gṛhaṃ sūnyam.” の (2) の場合である。(1) は、出典不明の「文法書などの練習題」。わたしとしては、(1) はもっと多数の用例が見つかるかと踏んでいたのだが、調べ方が悪いのか、意外に少なかった。というより、ゴンダ・鎧 [1974] に遙かに先立つ、泉 [1944] が見つかったのがむしろ幸運だったと言うべきか。袴谷先生の用例も、この括りにいれておく。

(1) 文法書の練習題 (出典不明)

apuṭrasya gṛhaṃ sūnyam.

「子なき者の家は空虚なり²¹」(泉芳璟訳) 43 頁

「息子のない人の家は空虚である」(ゴンダ・鎧 [1974] →拙訳)

「子供のない人の家は虚しい (sūnya)」? (袴谷訳)

(2) 『ヒトーパデーシャ』中の詩節の第 1 パーダ²²

apuṭrasya gṛhaṃ sūnyam.

21 泉芳璟氏がその「サンスクリット語初等文法書」たる『入門サンスクリット』、泉芳璟 [1944] の 18 文ある〈演習第一〉の 7 番目に、ゴンダと同一の “apuṭrasya gṛhaṃ sūnyam” を出し、「子なき者の家は空虚なり。」との訳文を与えているのを見て、わたしは不思議でならない。このサンスクリット文を含めて 18 文あるうちの半数以上は、ゴンダの練習題の中にも見いだせるものである。偶然の一致とはどうにも考え難いのである。教科書が書かれたのは泉 [1944] の方がゴンダよりも早い。ソースが一緒の可能性はあるのである。その謎 (種本) を突き止めようとして、泉芳璟氏が同書の「序言」に上げている種々の文法書にざっと当たってみたが、残念ながら、突き止められなかった。Fick [1891/1922] か Bühler [1888] かと当たりをつけてはいるのだが。

22 第 1 パーダのテキストは共通でも、第 2 パーダ以降に若干のヴァリエーションがあるものの、引用する訳文はテキストを示さずに、訳文のみを引く。われわれとしては第 1 パーダの訳文、とりわけ、その apuṭrasya の訳語に注目すればよいわけだ。

(34) aputra 考、またはベートルインクの不覚？（金沢）

“The house of the childless is empty; and so is the heart of him who hath no wife. The mind of a fool is empty; and everything is empty, where there is poverty.” (Wilkins [1787], p.57) (Wilkins [1787//1885], pp.69-70)

“Empty is the house of a childless man; as empty is the mind of a batchelor; empty are all quarters of the world to an ignorant man; but poverty is total emptiness.” (Jones [1807], p.38)

“Verlassen ist das Haus des Kinder- und Freundeslosen. Verlassen ist der Thor aus Erden. Verlassen ist die Armuth überall. (120)” (Müller [1844], pp.41-42)

“134—Empty is the house of a childless man; and of him who is destitute of a true friend. Empty are all quarters of the world to an ignorant man. Poverty is total emptiness.” (Johnson [1848], p.25)

“La maison d’un homme qui n’a point de fils est une maison vide; il en est de même pour celui qui n’a pas un bon ami pour l’ignorant, le régions de l’univers sont vides tout est vide dans la pauvreté.” (Lancereau [1855], p.44)

“Again and, Of a son-less the house empty, of one of a good-friend-destitute and, of a fool and the regions empty, all-empty poverty. (125)” (Müller [1864], p.68)

“Leer ist das Haus dem Kinderlosen; leer die ganze Welt dem, der keine Angehörigen hat; leer das Herz dem Thoren; leer Alles der Armuth.” (Böhlingk [1870-1873//1966], i, p.82)

“135. The house of the childless (is) empty, (so is the house) of one destitute of a true friend; for a fool the regions of space (are) empty; totally blank (is) poverty.” (Pincott [1880], p.22)

“Wer kinderlos ist und wer die edlen Freunde verlor, dennen ist das haus verödet, dem Thoren ist die Welt verödet, ganz verödet ist die Armut.” (Schoenberg [1884], p.41)

“Vuota è la casa di chi non ha figli e di chi è privo di buoni amici, vuoto è il cuore dello stolto, sopra ogni cosa è vuota la povertà (96).” (Nazari [1896], p.21)

“To a childless person as well as to one without a true companion, the house is empty (cheerless); and to a fool all the directions are empty, but everything is empty where there is poverty. (129)” (Dravid [1906], p.25)

“The house of the sonless is void, and so is of one who has no good friend; all the quarters are void to a fool, but all is void to poverty.” (Kāle [1910], Tr., p.25)

“Empty is the house of a sonless man; empty is a place where there are no kinsfolk;

empty is the mind of a fool; empty in all respects is poverty.” (Edgerton [1926], i, p.174)

「子もなく、また真実の友を欠けるものの家は空なり」(平松 [1957]) 99 頁

「子のなき人の住居 (すまい) は空 (うつろ)」(金倉・北川 [1968]) 55 頁

(3) 『土の小車』中の詩節の第 1 パーダ

śūnyam aputrasya gr̥ham.

“Leer erscheint das Haus dem Kinderlosen, ewig leer dem, der keinen guten Freund hat; für den Thoren ist Alles leer, wohin er auch schauen mag; für den Armen ist Alles leer.” (Böhlingk [1877], p.3)

“Empty his house, to whom no child was born;/ Thrice empty his, who lacks true friends and sure;

To fools, the world is empty and forlorn;/ But all that is, is empty to the poor.” (Ryder [1905], p.3)

“The home of a sonless person is empty; he who has not a real friend finds all time empty; the quarters are empty to a fool; and everything is empty to a poor man. (8)” (Kāle [1924//162/1982], p.11)

“Desolate is the house of him who is childless; desolate is the time to one who has no faithful friend; desolate are the regions of the earth to a fool; but, everything is desolate to the poor. (8)” (Nerurkar [1937], Tr., p.2)

“Empty [is] the house for one without a son; for him who has no real friend [evrything, or, the house is] empty for long; for a fool, empty [are] the quarters; for a poor [person] all [is] empty. (8)” (Karmarkar [1937//1950/2002], p.3)

「子のない人の家は空 (から)」(岩本 [1959]) 185 頁

(4) 『ヴィクラマ・チャリタ』

“aputrasya gatir nāsti **svargo** naiva katham ca na /

tasmāt putramukhaṃ dṛṣṭvā paścād bhavati tāpasah //” (Böhlingk [1863-1865], iii, p.30)

“3532. Für den Sohnlosen giebt es keine Zuflucht und auch keinen Himmel; darum wird man erst dann Asket, wenn man eines Sohnes Antlitz gesehen hat (d.i. wenn man einen Sohn gezeugt hat).” (Böhlingk [1863-1865], iii, p.30)

“aputrasya gatir na[^]asti **svarge** na[^]eva ca na[^]eva ca /

tasmāt putra-mukhaṃ dr̥ṣtvā paścād bhavati tāpasah //” (Böhtlingk [1870-1873], i, p.81)

“443.(3532.) Nie und nimmer gelangt ein **Sohnloser** in den Himmel; darum wird man erst dann Asket, wenn man eines Sohnes Antlitz gesehen hat (d.i. wenn man einen Sohn gezeugt hat).” (Böhtlingk [1870-1873], i, p.82)

“aputrasya gatir nā[^]sti **svargo** nā[^]iva ca nā[^]iva ca;

tasmāt putramukhaṃ dr̥ṣtvā bhavet paścād dhi tāpasah.” (Edgerton [1926], ii, p.61)

“There is no help [or, ‘no going to heaven’] **without a son**. And so: no son; paradise is never, never for him. Therefore only after seeing his son’s face should a man become an ascetic.” (Edgerton [1926], i, p.67)

いかが。こうして諸訳者たちによる該当箇所のアプトラスヤに対する訳語をざっと俯瞰してわかることは、最初期の訳例を初めとして、英語の場合、圧倒的に“childless”が多いということである。ドイツ語訳の初例としてここで扱っているベートルリンクとほぼ同世代と言い得るわれらがマックス・ミュラー Max Müller も「息子」Sohnではなく「子ども」Kindとしていることが意味深いように思われる。訳例は抽出し得ないが、ベートルリンクが参照していることが明らかかなサンスクリット語テキストは、あのシュレーゲル A.W.Schlegel とラッセン Ch.Lassen のもの。そして英訳も遺しているジョンソン Francis Johnson のものである。大シュレーゲルは、確かドイツはボン大学の初代サンスクリット語の教授として、そこで学位をも取得しているベートルリンクを教えてもいるはずである。ベートルリンクに限らず、古典の研究者は皆先行研究を気につけて、自らの研究成果を捻り出すのである。マックス・ミュラーは、『ヒトーパデーシャ』のドイツ語による全訳を刊行して、しばらくして後、今度は英語訳も刊行することになるが、その際には、kinderlos から sonless に変更している。また、初期の近代語による諸訳が主に西欧圏の研究者によって推進されたということもやはり関係があるように思われる。インド人の専門家たちは、外国人の研究者に比して、aputra に対する語感の初めからしっかりと維持しているように見える。そしてわれらが日本人の場合は、初期にあつては先行する欧米の有名研究者の訳に引きずられることが多かったのではないかと推察される。また、事例は多くはないものの、ここで参照し得たフランス語訳、イタリア語訳がかなり早い時期のものであるにも拘わらず、「子ども」ではなく、しっかりと「息子」を選び取っていることにもそれなりの理由を見出すことも可能かもしれない。またベートル

リンクの Sohn と Kind の使い分けに関してであるが、当人にとっては両語は別義の語として意識されていなかった可能性もある。詩としてではない散文による訳とはいえ、ドイツ人は、やはり単調な言い回し、単調な表現を避ける傾向があるのではないか。

むすびにかえて

1976 年に最初の一冊が刊行された『史的百科大梵語辞典』 *An Encyclopaedic Dictionary of Sanskrit On Historical Principles* が今も継続刊行中だが、わたしとしては、それを使ってひねもすサンスクリット文献に遊ぶ日々を愉しみにしていたのである。だが、刊行開始後 40 年以上が経過しても、まだ最初の a- の項目を突破できないでいる。自分が生きている間には、大好きな？ avinābhāva²³ ぐらいには辿り着くだろうとも思っていたが、どうもこの調子だとわからなくなってきた。が、幸い、今問題にしている aputra は、第 28 巻 (2012) でなんとか通り過ぎているので、見てみた。aputra だけで、p.4893 から p.4898 の、A4 縦二段組で 6 頁が割かれている。その大半が用例である、aputra の用例がそれこそ山のように出ているので嬉しくなる²⁴。

例えば昔読んだことのある『カター・サリット・サーガラ』のこんな用例 (p.4895 左) が引かれている。

“tato jāmātaraṃ rājye vinītamatiṃ eva tam /

so[^]abhiścya yayau gaṅgām [aputro] dehamuktaye //” (KathāSaSāg. xii. 5. 90)

「王子のない王は娘婿のヴィニータ・マティを即位させ、みずからは捨身のためにガンジス河に赴いた。」(岩本 [1961] 74-75 頁)

「そこで息子のいない (aputra)かの [王] は、娘婿 (jāmātr) である、他ならぬそのヴィニータマティを即位させた後に、捨身 (dehamukti) のために、ガンジス河に赴いた。」(拙訳)

また、次の用例 (p.4895 左) が続く。

“mrte bhartary aputrāyās tasyā me vṛttaye[^]amunā /

23 金沢 [1983] など参照。

24 無類に嬉しいこの辞典、現時点でどこまで出ているか不明だが、わたしの手許にあるのは、第 32 巻 (2017) が最新巻である。ap を越えて ab に入ってる。もしやと思って最終頁を見ると、“abādhāpatti” (p.5708 右) である。わたしとしては、ベートリンクなどの『ヒトーパデーシャ』などの用例にある “abāndhava-” はまだであった。残念至極。

tajjīvanacaturbhāgo datto rājñā dayālunā //” (KathāSaSāg. xii. 6. 258)

「夫が死にました後、子供のいない 妾の生活のために、情深い王さまは夫の俸禄の四分の一を妾に下賜されました。」(岩本 [1961] 131 頁)

「夫が死んだ後、息子のいない 他ならぬわたしの生活のために、かの情深い王によって、その [夫の] 俸禄の四分の一が与えられた。」(拙訳)

そうかと思うと『マヌ法典』のこんな用例 (p.4897 右) も引かれている。

“mr̥te bhartari sādhvī strī brahmacarye vyavasthitā /

svargaṃ gacchaty aputrāpi yathā te brahmacāriṇaḥ //” (ManuSm.5.160) (Jolly [1887], V-160: p.113)

「一六〇 夫の死後も貞節を盡し有徳なる妻は、たとへ子息を有せずとも、あたかも彼等純潔を守れる人々の如くに天に達す。」(田辺 [1953] 164 頁)

「五・一六〇 そのような純潔を守り通した者たちのように、夫の死後、純潔を決意した貞節な妻は息子がなくても天界に赴く。」(渡瀬 [1991] 184 頁)

「夫が死んだ後、梵行に住する善良な女性は、かりに息子がいないとしても、かの梵行者たちのように、天界に赴く。」(拙訳)

さらにまた、この『辞典』のおかげで、例の『ヒトパーデーシャ』の詩節が引かれる他作品を容易に知ることが出来たのは幸いである。すなわち、“śūnyam aputrasya gr̥ham ... sarvaṃ śūnyam daridrasya” (p.4896 左) に対して、“Tantrākhyā. 68. 7” と “PañcaT. 2. 34 (232.10)” という二つの典拠にわたしは注目した。いわゆる『パンチャ・タントラ』の二つのバージョンにも、その用例があるということである。分冊形式で刊行されているこの『辞典』の有り難い点は、それぞれの巻頭に、典拠となる全文の素性が明記されている点である。それらが手許になくとも、その情報に基づいて、直ちにその用例に参入出来る点がある。前者はヘルテル Johannes Hertel の Harvard Oriental Series 14 (1915)、後者は、エジャートンの American Oriental Series 2 (1924)。当然のように、今回のわたしには、その両大家が、問題の aputrasya にどういう訳語を与えているかが興味あるところである。特に前者は、ヘルテルによるドイツ語訳が得られるだろうと考えた。まず前者の用例は、以下の通りである。

“śūnyam aputrasya gr̥ham ciraśūnyam yasya nāsti sanmitram /

mūr̥khasya diśaḥ śūnyāḥ sarvaṃ śūnyam daridrasya //59//” (Hertel [1915], p.68, 1.7: II-59)

だがここには、デーヴァナーガリーによるテキストだけで、期待していた独

訳はなかったが、このヘルテルは、このテキスト刊行に先立って別途独訳を刊行しているのである。それが、以下のものである。

“59. Leer ist das Haus eines [Mannes] , dem ein Sohn fehlt, lange [“ewig”] leer [ist das Haus] dessen, der keinen guten Freund besitzt. Für den Toren sind die Himmelsgegenden [= die ganze Welt] leer; alles ist leer für den Armen.” (Hertel [1909], ii, p.76)

ベートリンク同様、sohnlos という語は用いられなかったにしても、しっかりと息子 Sohn を使って、関係代名詞を用いて訳文が仕立てられているのである。「息子のいない人の家は空虚である。」

一方、後者のエジャートンのは、以下の通りである。

“sūnyam apurasya grhaṃ hr̥c chūnyam yasya nāsti sanmitram mūrkhasya diśaḥ sūnyāḥ sarvaṃ sūnyam daridrasya.” (Edgerton [1924], p.232, l.10: II-34)

“Empty is the house of a man without a son, empty is the heart of a man who has not a faithful friend; empty are [all] quarters for a fool, everything is empty for a poor man. 34” (Edgerton [1924], ii, p.343: II-34:)

ヘルテルと同様、エジャートンも「息子のいない人の家は空虚である。」

どうやら、法律問題（ヒンドゥー教の dharma）が絡んでくる場合には、aputra の解釈が厳格になるようである。が、「一切皆空」を強力に押し出そうとする仏教的な命題ならともかくとして、日常的な情緒に訴えるような記述の場合には、aputra の取り扱いも、どうやら緩やかに甘くなって、「子ども」でも「息子」でもどちらでもと済まされることもあるのであろう。『ヒトーパデーシャ』や『土の小車』の用例は、後者。別に論じる予定の文殊菩薩が維摩居士に突きつけた “sūnyam te grhapate grham”（居士よ、あなたの家は空虚である）は、むしろ後者である。そして『獅子座三十二話』 = 『ヴィクラマ・チャリタ』の天国 (svarga) がらみの用例は、前者として処理されるようである。「息子」か「娘」かの違いは、インドにあっては法律上の大問題である。

手許にある『獅子座三十二話』のインド人による刊本には、この文 “apurasya grhaṃ sūnyam” は、サンスクリット語で、“apurasya putra-hīnasya janasya, grhaṃ sūnyam nirjanavanavat pratibhāti ity arthaḥ” と註釈されていた。「[apurasya [というのは]「息子のいない人の／息子のいない人にとって」] [という意味で、その者の／その者にとって]、家 (grha) が、「空である (sūnya)」 [というのは]「人

けのない森のように (nirjanavanavat) 見える／思われる (pratibhāti) という意味である。」(拙訳)

本攷冒頭で紹介した袴谷先生の「寂寥感」というものの、実質がこれかも知れないと思うのである。これは、普遍的な真実をめぐる「主張」というものではなく、個人の日常的な情緒とも言い得る主観の披瀝に過ぎないものであり、解釈に融通性があるとも言い得るのである。その結果が、実際は「息子のいない」だけれど「子どものいない」という意味こそが作者の意図である、などの理解を生んだと言えるのではあるまいか。レトリックの世界、文飾の世界。確かにおしゃれな警句ではある。だが、ベートルリンクによって、443としてあがっている apurasya を使った箴言の方は、ややそれとは趣を異にしているようにわたしには思われる。ことはインド社会の(ヒンドゥー教の)法律問題(dharma)に関わるのである²⁵。その場合には、「息子のいない」でも「子どものいない」でも、どちらでもいいというわけには行かないのではないか。「息子のいない」は「息子のいない」という意味である。裁判で白黒決着をつける必要がある。

実のところ、わたしは、サンスクリット語原典が発見されたという『維摩経』に於ける、文殊菩薩と維摩居士の「空をめぐる問答」問題にここしばらくは関わっていたこともあって、その哲学的意味に大に関心がある。その最中にわかenに構想された本攷は、ベートルリンク先生がその名著『インド箴言集(第二版)』で共に apurasya で始まる二つの箴言 443 と 444 の共通する apurasya のうちの前者には、文字通り sohnlos を用い、後者には kinderlos を用いていることのわけを探る作業を目指すものとなった。その作業の間中、二つの箴言のうち、444 は、文殊菩薩の “sūnyam te gṛhapatē gṛham” [「維摩」居士よ、あなたの家は空虚である]、443 は、維摩の “sarvabuddhakṣetrāṇy api mañjuśrīḥ sūnyāni” [文殊[菩薩]よ、一切の仏国土もまた空である]に対応するのではないかとの思いをぬぐい去ることはできなかつたのである。その問題にこそ早く参究すべきと常々考えてきたが、このコロナ禍ではとことん気が重く、その sūnya 問題はいつまでも先送りしたいというのが偽らざるところである。また、aputra とあつたら、何をおいても「息子のいない」と訳すべきであり、また例えば hṛdaya とあつたら、「心」などと寄り道することなく、先ずは何をおいても「心臓」と訳すべきで

25 ここでは詳しくは触れないが、インド社会における「息子」の果たす役割全般に関しては、田辺[1960]などを参照されたい。

ある、と言いたかったのである。なにか、それを阻むものがあるとすれば、それは、形／形式にがんじがらめの詩表現の問題をおいてはないだろうと考える。詩人ならざる者は、潔く詩表現を断念するしかないと考える。詩は詩をもって訳さなければなどとは誰も言いほしないのである。古典作品の訳者は、表現者の意図を微に入り細を穿って、ただ徹底的に追求すべきと考えるのである。(了)

【略号・参考文献】

- Acharya, Diwakar
 [2009]: *The Little Clay Cart by Śūdraka*, n.p.
 Ainapure, Wasudevacharya
 [1908]: *The Hitopadesa of Nārāyana Pandit with Various Reading*, Bombay.
 Böhtlingk, Otto (1815-1904)
 [1845]: *Sanskrit-Chrestomathie*, St.Petersberg.
 [1863-1865]: *Indische Sprüche. Sanskrit und Deutsch*, 3 Vols, St.Petersburg.
 [1870-1873]: *Indische Sprüche. Sanskrit und Deutsch(2nd Ed.)*²⁶, 3 Vols, St.Petersburg.
 [1877]: *Sanskrit-Chrestomathie(2nd Ed.)*, St.Petersburg.
 Böhtlingk, Otto & Roth, Rudolph (1821-1895)
 [1852-1875]: *Sanskrit-Wörterbuch*, 7 Vols, St.Petersburg.
 Brough, John
 [1951]: *Selections from Classical Sanskrit Literature with English Translation and Note*, London.
 Bühler, Georg (1837-1898)
 [1883]: *Leitfaden für den Elementarkursus des Sanskrit*, Wien.
 Caland, W. (1859-1932)
 [1917]: *Sāvitrī und Nala, zwei Episoden aus dem Mahābhārata. Text mit kurzen erklärenden Notizen und Glossar*, Utrecht.
 Cappeller, Carl (1840-1925)
 [1891]: *A Sanskrit-English Dictionary, Based upon the St. Petersburg Lexicons*, London &

26 田中 [1967] に「・・・これらの詞華集にならって、サンスクリット辞典の編纂者として有名なオットー・ベートリンク Otto Böhtlingk の作った『インド詞華集』 *Indische Sprüche* (二版、一八七〇～七二) は七六一三の詩句とそのドイツ語訳を取め、名実ともにサンスクリット詞華集のうちもっとも完備したもので、本書も最近復刻版が出版された。」(73-74 頁) とある。上村・風間 [2010] にも、「格言集には、大辞典をつかったベートリンクが、その副産物として編纂した *Indische Sprüchen, Sanskrit und Deutsch* (Petersburg, 1863-65) がある。これには 5,419 の格言が収められていたが、その後 1870 から 73 年にかけて増補され、7,673 のことわざをふくむ 3 巻本の第 2 版がまとめられた。」(314 頁) とある。齟齬する数字に関しては後者が正しいが、後者の記述からは、第一版は、「3 巻本」ではないようにも読めるが、第一版も三巻本である。

- Strassburg.
Dravid, B.T. (=Iyar, Sheshadri)
[1906]: *English Translation of Hitopadesha(2nd Ed)*, Bombay.
Edgerton, Franklin (1885-1963)
[1924]: *The Panchatantra Reconstructed...*, 2 Volumes, New Haven.
[1926]: *Vikrama's Adventures or The Thirty-Two Tales of the Throne*, 2 Parts²⁷, Cambridge, Mass.
Fick, Richard (1867-1944)
[1891/1922]: *Praktische Grammatik der Sanskrit-Sprache für den Selbstunterricht(4th Ed.)*, Wien & Leipzig.
Ford, Gordon B., Jr.
[1966]: *A Concise Elementary Grammar of the Sanskrit Language by Jan Gonda*, Leiden.
Garbe, Richard (1857-1927)
[1909]: *Otto Böhtlingk's Sanskrit-Chrestomathie(3rd Ed.)*, Leipzig.
Gonda, J. (1905-1991)
[1948]: *Kurze Elementar-Grammatik der Sanskrit-Sprache. Mit Übungsbeispielen, Lesestücken und einem Glossar.(3rd Ed.)*, Leiden.
Grassmann, Hermann (1809-1877)
[1873]: *Wörterbuch zum Rig-Veda*, Leipzig. (4. Neudruck, Wiesbaden, 1964)
Hertel, Johannes (1872-1955)
[1909]: *Tantrākhyāyika. Die Älteste Fassung des Pañcatantra...*, 2 Parts, Leipzig & Berlin.
[1915]: *The Panchatantra. A Collection of Ancient Hindu Tales in its Oldest Recension, The Kashmirian, Entitled Tantrakhayika...*, Cambridge, Mass.
Johnson, Francis (1875-1876)
[1847]: *Hitopadeśa. The Sanskrit Text, with A Grammatical Analysis*, London & Hertford.
[1848]: *Hitopadeśa or Salutory Counsels of Vishnu Śarman, in A Series of Connected Fables, Interpreted with Moral, Prudential, and Poetical Maxims*, London & Hertford.
Jolly, J. (1849-1932)
[1887]: *Mānava Dharma-Śāstra: The Code of Manu*, London.
Jones, William (1746-1794)
[1807]: *Works of Sir William Jones*, Vol.13, London.
Kāle, M.R.
[1896, 1910²⁸//1976]: *Hitopadeśa of Nārāyaṇa*, Delhi, etc.

27 エジャートンの『ヴィクラマ・チャリタ』の研究は二つの部分Part 1 (英訳註)とPart 2 (テキスト)の二分冊として1926年に刊行された。前者はHarvard Oriental Series 26、後者はHOS 27となる。

28 辻 [1973] 328頁によれば、Kāleによる英訳がテキストに付加されて刊行されたのはテキストの第二版(1906)時とあるが、第三版(1910)の序文によると「a full translationが付加された」ものようで、ここでは、一応1910年とした。第二版は未確認である。

- [1924//1962/1982]: *The Mṛichchhakatika of Sudraka*, Delhi, etc.
 Karmarkar, R.D.
 [1937/1950//2002]: *Mṛcchakaṭika of Śūdraka*, Delhi.
 [1963//1971]: *Bhavabhūti*, Dharwar.
 [2002]: *Uttarāmacarita of Bhavabhūti(3rd Ed.)*, Delhi.
 Lancereau, Edouard (1819-1895)
 [1855]: *Hitopadeśa ou L'Instruction Utile...*, Paris.
 Müller, Max (1823-1900)
 [1844]: *Hitopadeśa. Eine alte indische Fabersammlung aus dem Sanskrit zum ersten Mal in das Deutsche übers.*, Leipzig.
 [1864]: *The First Book of the Hitopadeśa. Containing the Sanskrit Text, with Interlinear Translation, Grammatical Analysis, and English Translation*, London.
 Mylius, Klaus
 [2001]: *Langenscheidts Handwörterbuch Sanskrit-Deutsch*, Berlin, etc.
 Nārāyaṇ Rām Āchārya
 [1946]: *The Manusmṛti with the Commentary Manvarthamuktāvali of Kullūka(10th Ed.)*, Bombay.
 Nazari, Oreste (1866-1923)
 [1896]: *Lo Hitopadeṣa o Buono Ammaestramento di Nārāyana*, Torino.
 Nerurkar, Vasant Ramchandra
 [1937]: *The Mṛichchhakatika of Śūdraka (2nd Ed.)*, Bombay.
 Peterson, Peter
 [1887//1986/1999]: *Hitopadeśa (Complete), Text with Introduction and Notes in English*, Delhi.
 Pincott, Frederic (1836-1896)
 [1880]: *Hitopadesa. A New Literal Translation from the Sanskrit Text of Prof. F. Johnson for the Use of Students*, London.
 Ryder, Arthur William (1877-1938)
 [1905]: *The Little Clay Cart [Mṛcchakaṭika] , A Hindu Drama Attributed to King Shūdraka*, Cambridge, Mass.
 Sathe, J.D., etc.
 [2012]: *An Encyclopaedic Dictionary of Sanskrit on Historical Principles, Vol.28*, Pune.
 Schlegel, August Wilhelm (1767-1829) & Lassen, Christian (1800-1876)
 [1829-30]: *Hitopadesas id est Institutio Salutaris...*, 2 Parts, Bonnae ad Rhenum.
 Schoenberg, J.
 [1884]: *Der Hitopadescha. Altindische Märchen und Sprüche*, Wien.
 Stache-Rosen, Valentina
 [1981]: *German Indologists: Biographies of Scholars in Indian Studies Writing in German...*, New Delhi.
 Stchoupak, N. , Nitti, L. & Renou, L. (1896-1966)
 [1980]: *Dictionnaire Sanskrit-Français*, Paris.
 Thumb, A. (1815-1915) & Hauschild, R. (1901-1972)

(44) aputra 考、またはベートルインクの不覚? (金沢)

[1959]: *Handbuch des Sanskrit...*, II .Teil, Heidelberg.

Törzsök, Judit

[2007]: “*Friendly Advice*” by Nārāyaṇa & “*King Vikrama’s Adventures*”, n.p.

Wilkins, Charles (1749-1836⁹⁾)

[1787//1885]: *Fables and Proverbs from the Sanskrit Being Hitopadesa*, London.

Wezler, Albrecht (1938-)

[1965]: *Nala und Damayantī, Ein Episode aus dem Mahābhārata*, Stuttgart.

泉芳環

[1944]: 著『入門サンスクリット』三笠書房

岩本裕

[1959]: 訳「土の小車」『インド集』<世界文学体系4>筑摩書房

[1961]: 訳『インド古典説話集 カター・サリット・サーガラ (四)』岩波文庫

金倉圓照・北川秀則

[1968]: 訳『ヒトーパデーシャ』岩波文庫

金沢篤

[1983]: 「クマールラと <avinābhāva>」『印度学仏教学研究』第31巻第2号

[1985]: 「ラヴクラフトと『禪の書』—お疲れの女子と蕩児と男性に—」『《定本ラヴクラ

フト全集5》月報⑥』国書刊行会

上村勝彦・風間喜代三

[2010]: 著『サンスクリット語・その形と心』三省堂

北川秀則・菱田邦男

[2000]: 訳『ナラ王物語とサーヴィトリ物語—古代インドの叙事詩—』山喜房仏書林

財団法人鈴木学術財団

[1986]: 編『漢訳対照梵和大辞典 (新装版)』講談社

榊亮三郎

[1907]: 著『解説 梵語学』眞言宗高等中學

田辺繁子

[1953]: 訳『マヌの法典』岩波文庫

[1960]: 著『マヌ法典の家族法』日本評論新社

辻直四郎

[1973]: 訳『サンスクリット文学史』岩波全書

田中於菟弥

[1967]: 訳『インドの文学』<世界の文学9>明治書院

袴谷憲昭

[1984//1989]: 「空性理解の問題点」『本覚思想批判』大蔵出版

29 ネット上の *Persons of Indian Studies by Prof. Dr. Klaus Karttunen* によれば、生年が <1749?> となっていたのに対し、“not 1750!” とあることから、“?” を外した。

平松友嗣

[1956]: 訳『ひとーばでーしゃ』理想社

鏡淳

[1974]: 訳『J・ゴンダ: サンスクリット語初等文法』春秋社

[1988]: 「ナラ王物語 主要文献」『成田山仏教研究所紀要』第11号(Ⅱ)

[1989a]: 訳『マハーバーラタ ナラ王物語』岩波文庫

[1989b]: 訳『J・ゴンダ・サンスクリット語初等文法』(新訂版) 春秋社

[2003]: 著『ナラ王物語—サンスクリット・テキスト、註解、語彙集、韻律考ほか』春秋社

渡瀬信之

[1991]: 訳『サンスクリット原典全訳 マス法典』中公文庫

〈キーワード〉 putra, śūnya, Otto Böhtlingk, *Hitopadeśa*, *Indische Sprüche*, 翻訳、インド学史